

た「豊かで楽しい食文化」という化け物にだまされないために、日本人の体に合った、それぞれの地域で育まれてきた伝統食をゆさぶり起こし、活力を与え、復権させなければなりません。

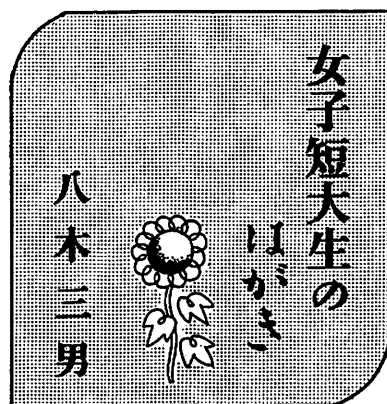
それが伝統食列車の目的です。のっぺ・煮菜・いとこ煮・あんぼ等々並べられた料理を見ながら、春、夏、秋、冬と季節ごとの料理に思いをはせました。

日本は北緯二六度（沖繩）から北緯四五度（稚内）と南北に長く、新潟はちょうどその中央に位置します。温暖湿潤の気候に恵まれ、照葉樹林帯に属し、地味にも恵まれ、作物の成育適地として世界一といっても過言ではないでしょう。その日本の、そして新潟の土壌で育った農畜産物と、長い海岸線に沿って収穫される魚介類や海藻類こそが私たちの命綱です。それぞれの地域の伝統的な食に光をあてて、健全な食生活を取り戻しましょう。

人類が生存している限り、その生命の維持に不可欠な産業は農業です。農

業は何度でも再生可能な生物資源が相手です。全国一の米作りをはこる新潟県の農業と伝統食に光をあてましょう。

（新潟市・元新潟大学教授）



その葉書の文面の思いがけなさ、所員たちの表情を一樣に複雑にした。

葉書は「にいがた県民教育研究所総務部人事課」に宛てられ、概略次のようであった。「わたくしは新潟県出身の東京の女子短大生である。新潟県で就職したいので貴社の業務内容等の資

料を送付されたい。ついては六月中旬に貴社を訪問したい。」

就職活動のマニュアル通りなのである、正確で生真面目な文章であった。

しかし、貴研究所とすべきところを貴社としているため、わが研究所を本人が実際になんだと考えているのか、わたくしたちにはわからなかった。

「それッ、人事課長はどなたでしたっけ」

「どんなルートでここを知ったんだろっ」

「電話帳でも見たのだろうか」
みんなは真からおかしがったのではなかった。いわば談笑ともとれるこんな会話は、二分で途切れた。

まず、女子学生の就職難が伝えられるなかで、わが研究所にまで問い合わせてきたその女子学生に対する同情があった。いずれにしろ鄭重に返事をすべきだということになった。「当方は会員制の小さな研究所である。当分増員する予定がない」旨、所員のひとり

が断り状を書いた。

それにしても「総務部人事課」とは恐れいった。有給の職員がたった一人のこの小さな「にいがた県民教育研究所」がどうしてそんなイメージになるのだろう。どんなルートからなのだろう。所員が一樣に知りたいと思ったところだった。

一方、研究所が大学生が訪問してくれるほどのスケールになったらしいだろうな、一瞬わたくしは他愛もなくそう思った。所員が「一樣に複雑な表情になった」と先にいったのは、正確には所員諸氏も一瞬そんな気持ちになったとわたくしが勝手に推測したということである。

しかし、いまの若者は本気でこの種の小さいが比較的自由な雰囲気職場を求めているのかもしれない。昨年の研究所の研究集会に参加した新潟大学の学生が、わが研究所に就職したいとあとで問い合わせてきたことがあった。また、大新聞の若い記者が研究所に取

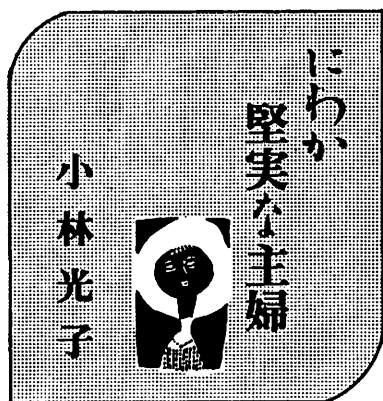
材にきて、研究所のような仕事ができたらいいだろうな、と本心ともつかず、呟いたこともあった。

建築技師であるわたくしの姪は大手の建設会社をやめ、甥は大スーパの係長を辞めた。最大手の会社で働いている他の甥も、できれば今の職場を辞めたいと思っている。パブルの頃は帰宅が毎日十時か十一時だった。ひとりは細君の里でペンションをやる夢を語った。

そんな風に考えると、先の短大生はあるいは正確にわが研究所の性格と業務内容を承知して問い合わせてきたのかもしれないと思えなくもない。そうだとすれば、葉書の文面はいかにも内容のない、空疎なものだ。

最近、二人の教師が所員になりたいといってくれた。ごく若手の教師のひとりが所員の討議にときどき参加してくれる。所員一同、この頃一段と元気がでてきた。

(にいがた県民教育研究所所長)



どうしてこのようなことになってしまったのか考えると、頭の中がぐちゃぐちゃになってしまっているのでそれは後回しにして……。とにかくもこんな風になったのは四〇年生きてきて初めてのこととで、「四〇年にして初めてだ」と胸がときめいたりもしているのです。「人生いろいろ、女もいろいろ」と口にはしてきたものの、このようなことをしている人というものが理解できず、ふふんと鼻先で笑ってきたというのが、正直のところの今までの私だっ